

『地域貢献を目指す国立大学の挑戦』

国立大学法人北見工業大学 学長

(北海道生産性本部:平成30年4月顧問・同年8月北見地区支部長就任)

鈴木 聡一郎(すずき・そういちろう)氏



略歴:昭和34年北海道生まれ。59年3月北海道大学工学部金属工学科卒業。平成2年9月同大学院工学研究科研究生(5年1月まで)。11年3月東北大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了、情報科学博士(東北大学)。

昭和59年4月(株)アシックス入社。平成元年4月同スポーツ工学研究所基礎研究部主査。5年4月北見工業大学工学部助手、助教授、准教授、教授、機械工学科長、共同研究推進センター長、産学官連携研究推進本部長(29年3月まで)、冬季スポーツ科学研究推進センター長、社会連携推進センター長を歴任し、30年4月国立大学法人北見工業大学学長に就任。現在に至る。

■専門分野 ロボット工学、福祉工学、スポーツ工学

■国立大学を取り巻く現況

大学運営の原資となる運営費交付金は、平成16年度の法人化以降ほぼ毎年減額され、平成29年度は前年度より全体で約20億円減となっており、国からの交付金は減っているという状況が続いている。

一方、大学の持つ強み・特色を最大限に活かし、持続的な機能強化を推進する“3つの重点支援枠”が設定され、本学は専門分野の特性に配慮しつつ、地域に貢献する大学として教育研究を推進する枠を選択した。

■工学研究による地域貢献

本学が置かれているオホーツク地域は、農・林・水産業を主要産業とする市町村が地域経済を支えていることが特徴である。また、全国的に少子高齢化が進行する中、一次産業の担い手も高齢化が進み、後継者不足が深刻化しており、AI(人工知能)やロボット技術による作業の自動化や省力化、精密化を図る試みが各地で進められている。

本学では、そのような現状を踏まえ、一次産業を工学的に支援する取組を重点研究分野に設定し、昨年7月に「オホーツク農林水産工学連携研究推進センター」を設立した。

現在、学外関係者と連携を深めつつ、ICT(情報通信技術)やロボット技術を活用した多くの共同研究を進めており、オホーツク地域から北海道・全国、そして世界へと発信できる研究成果を目指している。

また、北海道全域においては、観光サービスに力を入れる自治体が増加しており、特にインバウンドによる経済的効果を睨み、スキーを始めとした冬季スポーツを観光資源とする取組が進められている。

さらに、平昌五輪におけるLS北見(現ロコ・ソラーレ)の大活躍と、その後の盛り上がりは記憶に新しい。加えて、札幌市が2030年冬季五輪招致を目指していることもあり、北海道経済の発展と冬季スポーツの結び付きが益々強まっている。

本学では、平成28年に冬季スポーツ科学研究推進センターを設立以来、ICTやAI、バイオメカニクスなどの応用により、科学的にカーリングやアルペンスキーの競技選手を強化する取組を実施しており、各種目の日本代表選手達が本学の研究成果を活用し成績向上を図っている。

将来、この選手育成メソッドにより、全国からエリートジュニア選手が集結し、北見で生活しながら世界で活躍する選手として育ち、それに伴い多くのチームが合宿に訪れる“冬季スポーツの街”としての認知度を高め、スポーツ観光にも結び付けたいと考えている。

■三大学間連携の強化と経営統合

本学は、昨年5月に小樽商科大学及び帯広畜産大学と「経営改革の推進に関する合意書」を締結した。合意書では、それぞれ地域貢献を目指す三大学間の連携を強化し、多様化する教育への対応やオープンイノベーションを実現すること、2022年4月に経営法人を統合することを目標としている。互いに遠隔地にある三大学が、斬新で画期的・効果的な教育システムの確立、過去に例を見ないオープンイノベーションの実現を目指している。

北海道に新しい風を吹き込む挑戦に期待して頂きたい。